

平成二十七年年度 課程博士学位請求論文要旨

慶林坊日隆教学の研究

立正大学大学院
文学研究科仏教学専攻

米澤 晋之助

本論文は、日蓮教学史上、室町時代の代表的教学者である、八品門流の祖、慶林坊日隆(1385～1464)の教学思想を究明することを主題とする。従来の日隆教学研究では、日隆の教学思想と日蓮遺文、天台三大部本末との連関性、天台本覚思想等との関係性について考究することがなされてきた。これらの研究の中で、法華經本門において開顕される釈尊の永遠性の問題、すなわち日隆の顕本論については多数の研究結果が確認できる。しかし、久遠実成をどう捉えるのかについては、釈尊の永遠性、衆生教化の長さ、仏身論等の面からの検討が必要である。そこで本論文では、日隆の教学思想研究において従来あまり論じられてこなかった、一仏二名論について検討することで日隆の顕本論の一端に迫ることを主軸に置く。さらに、日隆の著述中に見られる天台密教諸師の文献引用についても新たな検討を加えることによって、日隆教学と天台本覚思想の関係性について究明するものであり、これらの視点は独自のものであると考えている。

本論文は全五章から構成している。第一章「日隆の略伝と教学研鑽の方法」は、全二節からなる。第一節「日隆の略伝」では、日隆の八十年の生涯を概観する方法論として、現在まで刊行されている日隆の略伝について再検討を加え、日隆の(1)教化活動、(2)著述活動、(3)門流表記、の三つの側面から検証している。そのことによって、日隆はその生涯において、(1)新たな寺院の建立・改宗・転派したと伝わる寺院は、約18ヶ寺を数えることができる。(2)著述活動では、300巻近くに及ぶ著述を著し、その殆どが五十二歳以降の執筆である。(3)日隆の著述より、自身が妙顕寺の流れを強く意識し、日蓮(1222～1282)の正統な継承者であるとの自覚を有していることが確認できる。第二節「日隆の教学研鑽の方法」では、日隆教学が成立する独自の立場として、(1)広学主義の否定、(2)日蓮遺文中心主義、(3)『観心本尊抄』を中心とする立場、(4)天台三大部本末と日本中古天台、の四つの視点より検証する。検証の結果、日隆の教学研鑽の方法は、広学主義を否定し、日蓮遺文を以て天台三大部本末、及び中古天台文献の解釈を試みている。また、『観心本尊抄』を中心に置いた日蓮遺文の拝読を勧奨することで、天台教学や日蓮門下の教義問題に対し、日蓮義をもって解釈している。

第二章「『法華宗本門弘經抄』述作と『三百帖』との連関性」は全二節からなる。第一節「述作次第をめぐる問題」では、金剛院日承著『弘經抄』の述作次第や、『法華宗本門弘經抄』(以下『弘經抄』)中に見える日隆自身の著述引用を辿ることで、述作次第について検証する。その結果、『弘經抄』の述作次第については明らかにしなかったが、第一帖から順を追って述作したとは言えず、同時進行的に作成されていた部分もあることが指摘できる。第二節「『法華宗本門弘經抄』と『三百帖』との連関性」では、従来あまり指摘されてこなかった『三百帖』の引用について、日隆の著述を概観する。このことによって、日隆の著述中、『三百帖』は『十三問答抄』1ヶ所、『弘經抄』228ヶ所、『開迹顕本宗要集』16ヶ所、引用していることが提示でき、その多くが、『三百帖』の問い→『三百帖』の答え→天台宗の義→当宗の義、とした経過を辿ることが指摘できる。特に『弘經抄』中には、「初学者のためにこの問題を論じる」等と類する記述も散見でき、日隆は『三百帖』を『弘經抄』中に引用することで、自身の教学研鑽だけでなく、門下教育のための一資料として『三百帖』を使用した一面があるのではないかと想定できる。

第三章「日隆の教学思想概観」では全五節からなり、先行研究を基礎としつつ、『弘經

抄』に主軸を置くことで、その様相を探る。第一節「本門八品正意論」では、本門八品と一品二半の相違について明らかにする。そのことによって、法華経本門八品は、一品二半のみならず、一代諸経をも包摂するものであることが分かる。第二節「付嘱論」では、上行付嘱と総付嘱について検討する。その結果、総付嘱と上行付嘱との関係性について、上行要付をもって如来神力品・嘱累品を見れば、相離れるものではないとする。第三節「機根論」では、衆生の機根として、本已有善の機と本未有善の機の二種について考察した結果、本已有善の機とは釈尊在世に脱益を得る者や像法に調熟を得る者を指す。また、本未有善の機は末法の衆生を指し、本門八品による仏種子（題目）の下種に限ることが分かる。第四節「三益論」では、末法の衆生成仏という問題に対し、種・熟・脱の三益について検証し、末法の衆生は、種・熟・脱の三益中、特に下種益を中心に据え、本門八品において上行菩薩に付嘱された妙法蓮華経を信心信行（末法下種）することで成仏へと導かれることが指摘できる。第五節「時間論」では、妙楽大師湛然（711～782）の十双歎、日蓮遺文における二十の大事、及び日隆の塵点劫解釈について明らかにしている。これらを検証すると、衆生成仏の根源は本門八品に説く久遠下種であると捉え、この久遠下種は五百億塵点劫の過去にあり、仏種を下す本仏釈尊とは五百億塵点劫の過去に成道し、因位の時には上行菩薩、本果に至れば釈尊になるとして、塵点劫実説を主張する。

第四章「一仏二名論の展開」は全五節からなる。第一節「日隆著述にみる「一仏二名」の表記」では、日隆の著述中に見える一仏二名の表記について抽出し検証する。検証の結果、日隆は釈尊を本果、上行菩薩を本因とし、釈尊即上行（仏界具九界）・上行即釈尊（九界具仏界）と規定することを一仏二名とする。第二節「日隆以前にみる「一仏二名」の表記」では、日隆以前の日蓮門下二師の著述に見える一仏二名の表記について明らかにする。このことにより、日隆以前では、等覺・妙覺を一仏二名、大日如来と釈尊を一仏異名等とする表記が見られることが分かる。第三節「日隆以降にみる「一仏二名」の表記」では、日隆以降に活躍した日蓮門下八師の一仏二名の表記について検討を加える。これらを検討すると、その多くは日隆を批判するための要素として一仏二名の引用が認められる。特に、日教・日要・日我等といった日興門流諸師の著述では、日隆の一仏二名の解釈を基礎として日蓮本仏論へと展開した可能性が示唆される。第四節「天台宗諸師の著述にみえる「一仏二名」の表記」では、天台宗十師の著述に焦点を当て、一仏二名の表記について検証する。その結果、等覺・妙覺を一仏二名として見る場合、『仁王経』『瓔珞経』『四十二字門』等を根拠することが指摘できる。第五節「諸宗派諸師の著述にみえる「一仏二名」の表記」では、真言宗・華嚴宗等の四師の著述にみえる一仏二名の表記について概観する。そのことにより、諸宗派四師の著述に見える一仏二名の語は、等覺と妙覺の関係について引用する傾向が窺え、真言教学や華嚴教学においても一仏二名の語を使用していることが注目できる。

第五章「日隆にみる日本天台教学批判とその影響」では全三節からなり、日隆の著述中に見える天台密教諸師の文献引用について分析することで、日隆教学の特質を知ることが目的とする。第一節「日隆にみる慈覺大師円仁批判」では、日隆の著述に見える、慈覺大師円仁（794～864）の文献引用について抽出し検証する。検証によって、円仁の

著述引用では、日隆は単に円仁を天台教学に真言を取り入れたとして批判するだけでなく、理同事勝の問題、塵点劫解釈の問題等といった種々の教義内容に触れ批判している。第二節「日隆にみる智証大師円珍批判」では、智証大師円珍（814 ～ 891）のものと伝わる著述も含め、どのように台密批判が展開されるのかを考察する。その結果、円珍の著述引用も円仁同様、塵点劫解釈の問題、釈尊の本因本果等の批判を中心としたものである。しかし、伝円仁『阿字秘釈』『阿若集』の書名は日隆の著述中において確認できず、その引用は、伝恵心僧都源信（942 ～ 1017）『教観大綱』の内容と一致するため、孫引き等といった可能性が指摘できる。第三節「日隆にみる五大院安然批判」では、日隆の著述において特に散見される五大院安然（841 ～ 903 一）の『教時問答』『菩提心義抄』等の引用に視座に置き検討を加える。検討の結果、安然の著述では、『教時問答』「十界之中其菩薩界常修常証無始無終。」、『菩提心義抄』「食体即覺体」の文が多数引用されている。この二文は、必ずしも安然批判を目的として引用したのではなく、日蓮義をもって安然の文の解釈がなされていることが注目できる。また特筆すべきこととして、日隆がこの三師を批判する場合、久遠義解釈に対し共通する要文として「皆在衆生。一念心中。」の文を提起することができ、日隆は教観相資の立場より塵点劫実説を強調し、三師の主張する止観勝法華劣の観心主義を強く批判する。

以上、本論文を通して、日隆は、自身を含めた末法の衆生は下機下根であるという、徹底した末法意識の存在が根底にあると考える。なぜなら、釈尊から直授され成仏が叶うのは釈尊在世の衆生（本已有善の機）のみであり、末法の衆生は下機下根（本未有善の機）のため、上行菩薩を介することによって、初めて釈尊の功德を享受できると考えるためである。こうした衆生が成仏するためには、釈尊から上行菩薩に付嘱された題目を信心、下種することでのみ実現されるため、一仏二名論が展開されていたのではないか。このように考える時、日隆の天台密教諸師に対する批判は必然的なものであり、平安末以降、室町期の日隆在世に流行した観心主義に彩られた中古天台本覚思想を批判し、教観相資の立場からその教学思想に対し超克を目指したことが分かる。